

第三十五章 併合

グレーデッドの奇妙な戦車に助けられてウクライナー共和国はソシアに反転攻勢を仕掛ける。たまらず撤退するソシア軍が残したものは拷問のうへの殺されたウクライナー人の死体だけだった。貴金属や携帯電話はもちろんのこと、めぼしい物品はすべて略奪された。逆に放棄された戦車や装甲車は旧式のポンコツばかりだった。

ウクライナー共和国はいくつかの民族から成る国家で不安定だったが、ソシアの侵略が始まると不思議なことに結束した。ソシア軍の暴行略奪が連帯を強くした。その一方でソシアと国境を接する地域では親ソシア派の国民が多い。その地域が不安定だった大統領プチレンコンにつけいる隙を与えてしまった。

ウクライナー軍が親ソシア勢力地域の奪還作戦が始めるとプチレンコンは焦り出す。当初、速攻で首都キープを押さえてウクライナー全体を支配下に置こうともくろんだ。しかし、西側諸国の猛反対と武器供与、そして大統領ダレデモスキーの強力なリーダーシップにプチレンコンの野望が頓挫する。

勝ち戦だと信じて疑わなかったソシア軍の横暴もあってウクライナー軍が体勢を立て直すのにあまり時間を要しなかった。そしてソシア軍の残虐行為が次々と明るみになると世界中の人

々から非難の声が上がる。もちろん国家として義理や経済問題など諸事情があつて国連でのソシア非難決議に棄権する国も結構あつた。

*

押し返されてしまつては元も子もない。プチレンコンは勢力の及ぶ範囲の併合を急いだ。親ソシア住民が多い地域で併合の賛否を問う住民投票を実施する。これまでも幾度か試みようとしたが、支配地域を広げてからの方が効率的だと考えてズルズルと延ばしてきた。しかし、思ひのほかウクライナ軍の強烈な反転攻勢で次々と支配地域が奪還されたから方針変更せざるを得なくなつた。

兵士が戸別訪問して強制的に投票させる。しかも投票箱は透明なアクリル製で「賛成」か「反対」か丸見えだつた。

すぐさま開票されて「ソシアへの併合賛成」が多数となつたが、出来レースとは言え数パーセントの「反対」票が存在したことはプチレンコンにショックを与えた。そこで弱体化を食い止めるために再びサボリーナ原子力発電所を支配下に置こうとする。

数ヶ月前クリム半島のブラックシー艦隊がレッド・エレファントに全滅させられたが、ソシアとクリム半島を結ぶ橋を通じて何とか建て直したが肝心の電力が確保できない。そこで再びクリム半島の北方に位置するサボリーナ原子力発電所の電力に目を付けた。

勢いを増したと言えどもウクライナ軍には原発を守るほどの力はない。一度は取り戻した

が簡単に再び占拠される。ウクライナーにとって重要インフラの原発はアキレス腱だった。そこで別の作戦を展開する。数年前、ソシアに併合されたクリーム半島とソシア本国をつなぐクリーム橋の攻撃作戦を立てる。この橋はクリーム半島併合後に建設された。目的は同島のブラックシー艦隊基地へ補給物資を輸送するためだった。

たった一両の戦車レッド・エレファントにブラックシー艦隊基地や艦隊が消滅した。しかし、そのときはウクライナー軍に奪還するだけの力がなかったからソシアがクリーム橋を使って基地を再構築した。そしてバルト海や極東に展開するソシア海軍艦船や旧式の艦船の解体を中止してかき集めて何とかブラックシー艦隊を復活させた。

クリーム半島とソシア間は水深が浅い。大型貨物船で物資を輸送すれば座礁してしまう。かといって小型貨物船でははかどらない。逆に浅いので橋を架けるのは簡単だ。衰えたと言ってもソシアは大国である。それに海上輸送に比べて陸上輸送は迅速に物を運べる。トラックでも十分な輸送量を確保できる。

*

原子力発電所は戦争に巻き込まれるとやっかいだ。世界中がサボリーナ原子力発電所の攻防で攻防を固唾をのんで見守る。国際原子力発電所監視委員会が発電所に乗りこむがソシア軍に拘束されてしまう。つまりプレンコン大統領は破れかぶれだ。

一方これまでのレッド・エレファント、コバルト・カウ、イエロー・タイガー、ハリー・マ

ウスの戦車にロシア軍が苦しめられてきたことは周知の事実だった。さらに海獣パンダの猛攻にも注目が集まった。ブラックシーのみならず東アジアの鯛湾海峡にも出没して中華民国海軍を苦しめた。もちろんパンダではなく超巨大オルカの仕業であることが徐々に明らかになる。パンダのふるさと中華民国の最新鋭戦闘艦ではないかとプチレンコンは同盟国中華民国を疑ったこともあった。

ともあれプチレンコンは引き際のタイミングを完全に見逃した。豊富な天然資源にあぐらをかいてエネルギーと核兵器でウクライナー共和国だけではなく世界中を恫喝した。結局、北風作戦を強行するロシアは孤立する。たとえば旧ロシア連邦の国々も一部を除いてロシア批判し始める。プチレンコンは自国はもちろん友好国からも距離を置かれることになる。

もとよりロシアはエネルギー資源は豊富だが人的資源が貧しい国だった。エネルギー資源で儲けた金を国民全員に行き渡らせれば良かったが、大統領は自らと取り巻き連中の懐を潤すだけで国民には回らなかった。それどころか天然ガスを使った火炎放射砲を国民に向ける。徴兵だ。ウクライナー国民は自ら志願する。しかし、ロシア国民は国外に避難する。ますます人的資源が減少する。政府関係者も大統領や高級官僚に付度しても見返りがないことに気付き始める。他人事のようにウクライナー侵攻をSNSで眺めていたロシア国民にも危機感が芽生えた。併合された親ロシア派の住民たちはもつと深刻だった。

独立あるいはロシアに編入を希望していた親ロシア派の居住地域はもともと内戦でインフラ

は破壊されて廢墟となっていた。ソシアの侵攻でウクライナー軍を排除したがソシアに余裕はなくインフラの復旧を後回しにした。併合されても同じでウクライナー軍の反転攻勢で以前より事態は悪化した。ソシア軍は親ソシア派を無視して撤退する。食糧確保すら困難なうえソシアへの避難を訴えるが無視された。

一体何のために併合したのか。併合すれば本国そのものだからプチレンコン大統領は自国防衛のための核兵器使用をちらつかせるが、併合した領土に影響が及ばないように核兵器を使用するのは不可能だ。核兵器で攻撃すれば併合した領土も確実に影響を受ける。前線や併合した地域に武器や食糧の補給が滞っているのに傷兵やソシアを支持した親ソシア派の住民を受け入れる体制も整っていない。

武力での併合は想像を絶する国力が必要となる。そのためには国民に犠牲を求めなければならぬ。このことは歴史が証明している。併合しても仲良くやっつけていけるとは限らない。むしろ逆で併合した国の住民を奴隷として搾取しなければ体力を消耗するだけだ。

植民地時代がいい例だ。搾取するものがあるうちは支配し続けるが、決して自国と同列に扱ふことはない。つまり完全な併合はしない。単なる植民地だ。植民地の住民を本国と同じ選挙権を与えることなどしない。かつての宗主国に従う独立国が存在しないのは当たり前だ。代が変わろうとも過去の恨みを忘れない。

*

併合というのは独立と相容れない。独立したと思つたら併合されることも多々ある。その後併合された国民が幸せになることはまずない。国民のための独立や併合ではなく権力者のための独立や併合だからだ。

権力者の演説で使われる「国民のために」と言う言葉を「自分のために」と置き換えれば演説としてはすつきりとするし、内容も理解しやすい。

併合した領土の国民を食わしていかなければならないから国民は自分たちの生活水準が落ちるかもしれないと不安がる。しかし、権力者にしてみれば領土を増やして他の大国に自らの力を誇示したいから無視する。ひどい権力者になると国民に今の生活水準に満足していると海外メディアにアピールさせる。

結局国民はいつも権力者の奴隷になる運命をたどる。これを打ち破るために民主主義が生まれた。しかし、民主主義国家になつたとしても所詮は選ばれた代表者の人格に左右される。選挙を通じてトップになる人に人格者はいるのだろうか。

選挙前は人格者だったが選挙後は仮面を脱ぐ政治家が多い。初めからいい加減な候補者が多いから、まだマシかもしれない。

ひよつとしたら人間以外の動物のリーダーの方が地位や名誉や金銭欲がないから立派かもしれない。知性や理性を持つ人間の方が立派ではないと言うことは何を意味するのだろうか。少なくとも生命体としては失格なのかもしれない。